

この世でなしいもの・神秘・夢幻

村上華岳の大規模な回顧展が、京都国立近代美術館で開催されている。今回は代表作である『裸婦図』や『日高河清姫図』、それに独特の風景画や牡丹の図、観音像など、多くの初公開作品も含め、初期から最晩年まで約三百点が並ぶ。書や油絵、下絵や書簡類もあわせて展示されていて、華岳の芸術を堪能し、またそのあらたな魅力を発見できる絶好の機会となっている。

修行時代の二点、『鵲』（今展は不出品）と『驢馬に夏草』は、いずれも華岳には珍しい動物画だ。熊の分厚く柔らかな毛皮のふさふさとした感じや、草いされの中で一休みする三頭の驢馬の穏やかな表情には、四条派の流れを汲む写実描写の中に、すでに華岳独自の感覚があらわれている。それは、対象にぐっと近接してクローズアップする視点や、視覚を通じて空気の肌ざわりや触覚的な手ざわりまでもが感じられるような表現であり、たとえば師の一人であった竹内栖鳳の写実よりも、さらに

村上華岳に通う近代詩の空気

高階絵里加



たかしな・えりか氏 東京大学文学部美術史学科卒。同大学院博士課程修了。文学博士。2000年から現職。著書に『異界の海―芳翠・清輝・天心における西洋―』、翻訳に『北斎百人―首つばがあとぎ』、『マネ』『モネ』など。

直接五感に訴えてくる。とりわけ『驢馬に夏草』は、明治四一年の第二回文展で三等賞を受賞した力作で、当時の批評にも、「村上華岳の『驢馬に夏草』は……頗る上出来で草の描写に多少申分はあるが不恰好な動物を旨く美化した所は確かに技

私には、動物たちのやさしげな眼が印象深い。熊や驢馬のどこか夢見るような眼つきは、のちの『裸婦図』や一連の観音像の半分まぶたを落とした、まどろむような視線に通じるものがある。動物も、観音も、人間から見れば半分異世界に属するものたちだ。そこには言葉はなく、深い感情とそれを伝える眼だけがある。いっぽう、華岳の描く人間たち、『夜桜』の酒を飲む人々や、踊る舞妓、そして安珍を追う『日高河』の清姫が、眼を閉じている、あるいは閉じているかのような細い眼をしているのは、酒や、踊りや、恋が、人間を現実から引き離し、異界へといざなうものだからだろう。狂おしい恋心に恍惚と身を

思はれ、思ふかの女よ」という一節が思い浮かぶ。上田敏の『海潮音』が出版され、青年たちの熱烈な支持を受けたのは、華岳十八歳の年であった。明治四〇年前後に豊かな美りを迎えた近代詩の数々は、若き画家の感性の根幹を形づくったに違いない。今ここにないものへの強い憧れと、自らの感情のしたたりをうたう、「風のあゆみ、静かなる午後の光に、……」空の色やはらかに青みわたり／夢深き樹には啼く／空しき鳥（三木露風『廢園』）、「色赤き、色赤き花の吐息……」（北原白秋『邪宗門』）のような詩句は、そのまま華岳の風景や花の雲囲気に通じている。



村上華岳「牡丹の園」(大正6年) 個人蔵

「自分は何かしらこの世でないものが描いてみたい」、「数や空は手段としてある、それ以外のものを暗示している」（『制作』第一巻第六号）と語る画家は、「詩の生命は暗示にして単なる事象の説明には非ず。……」我々は神秘を尚ひ、夢幻を歎ひ、そが腐爛したる類唐の紅を慕ふ（『邪宗門』）と宣言した詩人と、たしかに同じ時代の空気を吸っていたのである。（京都大学人文科学研究所助教 授）